

和久利誓一、飯田規和、新田実編

『岩波ロシア語辞典』

岩波書店、1992年6月、xx + 2256 + 37頁¹

はじめに

二ヶ国語の辞書というものは、いうまでもなく、対象となる国の言語、文化等の研究の歴史を表すものであり、またその国における当該言語の教育の水準を示すものでもある。露和辞典もまた、数多くの先達の努力の上に成り立っている。とりわけ故八杉貞利先生の『岩波版露和辞典』(1935年)、『岩波ロシア語辞典』(1960年)は、真に近代的な露和辞典として、また利用できる唯一の露和辞典として、斯学に果たしたその役割には、範疇を別するものがある。この辞書が八杉先生に捧げられているのも、この意味で当然のことといえよう。4年後の1964年にモスクワで刊行されたザルービンの露和辞典にも、1960年版の八杉先生の辞典が参考文献として掲げられていることは、すでに周知のことに属する。

その間、1945年にはコヴァレンコ編の露和辞典が、ハバロフスクにおいて刊行されたと聞いているが、管見にして実物に接したことはない。更に1954年には故井桁貞敏先生の『コンサイス露和辞典』が三省堂から刊行され、その携帯に便なること、語彙の豊富さ、語源の表示等の特徴によって、好評をもって迎えられた。また1975年にはロシア語教育が漸次普及しつつあることを背景に、故木村彰一先生をはじめとする、「木村グループ」による初学者用の中辞典として、ロシア語辞典としては初めて国際音標文字を附した、『博友社ロシア語辞典』が刊行された。

これらの辞書の編纂の歴史の背後には、もちろん当時のソヴェトにおける、新たな辞書の刊行の歴史があるが、上述した露和辞典は、これらソヴェトの辞書を参照しながらも、先学の成果を吸収しつつ成り立ったものであるといえる。しかし、本書と、本書よりわずかに早く、1988年に研究社から出版された東郷正延、染谷茂、磯谷孝、石山正三編『研究社露和辞典』との関係は、上述したような辞典間関係とは少しく異なっている。両者とも、いわば平行して成ったものであり、一方が他方の成果の上に立ててきたものではないからである。この意味で両者は、善かれ悪かれ常に比較される、いわば宿命のようなものを、生まれながら負うことを余儀なくされていると思われる。従って一方を称揚せんか、暗々裡に他方が貶せられたと感じる向きも、あるいはあるかも知れない。この意味で評者は、書評の意味について、再考する必要があると考える。

元来書評というものは、書評の対象となる労作をいわば材料にし、かつそこで論じられた内容が著者にとって納得でき、その後の研究に役立てることができるようなものだけ

¹ 『ロシア語ロシア文学研究』第28号 平成5(1993)年10月1日 113-122頁。

ればならない。もちろんこれはなかなか到達し難い理想ではあるけれども、少なくともそのような意識をもって評言はなされて然るべきである。「訳語が平明である」、「使いやすい」、「便利である」等々という、いわば印象批評は、この意味で生産的であるとは言えないであろう。その後の研究、この場合には辞書編纂、に資する事ができないからである。

しかしこのように考えた場合、ここで大きな問題に逢着せざるを得ない。論文、単行書の類ならば、その中に貫徹されている論理、目的、学的意義を論ずれば足りるが、辞書の場合、印象批評の道を取らないとすれば、どのような基準によってこれを評するかについては、未だその例が見られないように思われるからである。学会誌の編集委員会から依頼のあったとき、まず当惑したのは、これを考えてのことであった。もとより辞書というものは、対象とする国の言語のみならず、文化、ものの考え方、歴史などの文化現象の一切を映し出すものであるから、規準も、決して少ない数では収まらないであろう。しかし現状ではそのような規準を完全な形で提示することは、到底評者の能力の及ぶところではない。従って以下に述べることは、そのような規準の一つに基づけば何が言えるか、ということに限られる。いわば「辞書批評の方法試論」といったものにならざるを得ない。この点をまずお断りしておきたい。

1. まず辞書の規模についてであるが、たとえばアカデミーの17巻本辞書のように、余り大きさを顧慮しない場合は問題にしない。規模に制約が課せられていることを書評の前提とする。

次に辞書の機能についてである。辞書にはロシア語で書かれたテキストを理解するという受容の機能が第一に考えられるが、これは露和辞典の主要な機能である。これに対して如何にロシア語で表現するかという、表出の機能は、主として和露辞典の受け持つ領域である。しかし、露和辞典と雖も、完全に受容の機能に徹する訳にはいかない。現実に露和辞典によって表現を確かめるのは日常的に行われることだからである。このことが重要なのは、露和辞典の機能を受容に限れば、後にみる冗長度は極端に少なくすることができるが、表出の機能をもある程度考慮すれば、一定の冗長度は必要なものとなるからである。

辞書の内容、乃至構造は、その機能に最もよく適合するように作られてなければならないと考えられる。いわゆるダウン・サイジングによって小辞典あるいは中辞典を作る、最も手っとり早い方法は、見出語の語彙の数を少なくすることである。しかしその場合、語彙の選択の仕方にもよるが、何れにもせよ、多少とも受容の機能は損なわれる。語彙の選択が悪ければ、常に大辞典を座右におかなくては、用が足りないということになる。このような場合に、語彙の選択の主要な規準とされるのが、使用頻度であることは、今更いうまでもない。規模を縮小する際にも、その仕方が問題になるのである。

更に技術的問題がある。字の大きさ、ゴチックあるいはイタリックの使用の仕方、紙の質、装丁等がこれに属する。これらは、全く内容と関係ないように見えるかも知れないが、中には辞書の構造と密接に関連しているものがある。

2. イェルムスレウが、メタ理論のクリテリアとして、網羅性 *exhaustiveness*、単純性 *simplicity*、無矛盾性 *uncontradictoriness* を挙げていることは、よく知られている。この考えを援用すれば、網羅性というのは辞書の場合、必要な用法がすべて収められていることを意味し、また単純性は、それが必要最小限に収められていることを示すと考えることができる。これに対して無矛盾性の例としては、たとえばループが存在していないかどうか、という問題がある。ループというのは、例えば a という事項を引くと「b を見よ」と指示があり、b を引くと「a を見よ」となっていて、意義にたどり着けない場合である。矛盾の存在は理論の場合には重大で致命的なものであるが、辞書の場合には、修正が容易であり、単なる見落としのレベルに属するものであると考えられる。もちろんこのようなことは避けねばならないが、それは辞書の使用者が気がついたときに、労を厭わず著者に知らせることで解決するより外はない。

網羅性と単純性を上に述べたような意味に解すれば、これを統括するものとして、「冗長度」 *redundancy* という概念を考えることができる。必要な用法を網羅し、かつそれが最小限の用例で示されているときに、冗長度が零に等しいと考えるのである。これを計るために、次のような一群の概念を考える。ここで断っておかねばならないのは、日本語の「冗長度」という名前である。これがコノーテーションとして、何か一種のマイナス・イメージをもっているからである。しかし事実は決してそうではない。コミュニケーション理論でしばしば言及されるように、冗長度の全くない、冗長度ゼロの情報は、却って能率を削ぐことになる。例えば僅か一つの語を聞き逃しても、忽ち全体の意味が不明になるからである。他の手がかりによって失われた情報の修復ができないのである。もちろん余りに冗長度が大きい場合には、どの情報が本筋にかかわるものであるかが分からなくなり、効率が減少する。従って冗長度は必要不可欠なものである。ただこれが一定の枠内に収まっていることが、必要とされるのである。辞書の場合もまた、同然であると考えられる。ただしコミュニケーションのような場合には、情報が比較的短時間の裡に双方向性を以って行われるために、調節機能が働いて、自ずから冗長度は一定の範囲内に収まるようになるが、辞書の場合には、長い目でみれば、例えば売れ行きというような形で、調節機能が働くにしても、それには長い期間が必要とされるであろう。従って予め人為的に冗長度を調節しておくことは、是非とも必要であると思われる。

おそらく最初に述べたのはブルームフィールドであると思われるが、語結合に「内心的」 *endocentric* なものと、「外心的」 *exocentric* なものという区別が立てられる。これはもともと直接成分分析に由来する概念であって、内心的というのは、たとえば *poor John* のような場合である。このとき、この語結合は文中の役割に関しては、その構成要素の一方、即ち *John* と同じである。これに対して例えば *John ran* というとき、この語結合は全体としてその直接成分のどちらとも異なった役割をもっている。このようなものを「外心的」というのである。(L. Bloomfield, *Language*, reprint ed., London 1955, p. 194) この考えを少しく拡張して意味の分野に応用し、「意味的外心性」と「意味的内心性」というもの

を考える。意味的内心性というのは、構成要素のもつ意味の総和が語結合の意味に等しい場合であり、意味的外心性というのは、語結合全体の意味が、構成要素の総和とは異なっている場合である。例えば「狐の嫁入り」などは、意味的に外心的であるということになる。このような意味的内心性をもっている例が複数個ある時、一つを除いて他のものは冗長的であると考える。このような意味的内心性と外心性に対して、先に挙げたものは、形式的内心性及び外心性と呼ぶことにする。

辞書の場合、語の意義の外に最も重要なのは、意味的外心性をもつ語結合とその意義を示すことである。辞書の質を考える際、このクリテリアが満たされているかどうか、が一つの目安になると考えられる。逆に形式的にも意味的にも内心性をもつ語結合を多く収録すれば、辞書のサイズを大きくすることになり、冗長度を高めることになる。

一方意味的に内心的なものであっても、文法的、あるいは語結合上の新しい情報をもつものは、冗長的なものとは考えない。もちろん、同じ情報をもつものが複数個ある時は、一つを除いて冗長的であるとする。また意味的に内心的なものでも、論理的に考えれば同一の意味に対応する語結合の可能性が複数個存在する場合、そのどれが当該言語において慣用となっているかを示すことも必要である。例えば「辞書を使う」という場合、少なくとも論理的には *употреблять, пользоваться, использовать* などが考えられるが、慣用としては、後の二者が用いられる、というような場合である。これは前に述べた表出の機能に関連している。

冗長性には同じ語彙項目に属するものの外、異なった語彙項目の間にも存在することがある。たとえば *poor John* というとき、この同じ語結合が *poor* の項にも、また *John* の項にも掲げられているような場合である。このような種類の冗長性の場合にはどちらを省くかが問題になろう。そのためにもう一つ「基軸性」(“pivotality” 乃至は *стержневость*) という概念を導入する。これは語結合を構成する語の中のどの語が最も重要なものであるかを問うものである。これは意味的に外心的なものについては決定が必ずしも容易ではないが、意味的に内心的な語結合の場合でも、表出の機能において考えるか、あるいは受容の機能において考えるかによって異なると思われる。例えば *серная кислота* 「硫酸」という語結合に遭遇したとき、まず辞書で引くのは、*серная* という語であろう。

この語はもともと *сер* 「硫黄」から派生し「硫黄の」を意味する。従って *серная кислота* は意味的に外心的な語結合であるということになる。一方表出の機能において考えれば、まず辞書を引くのはより一般的な *кислота* であろう。従ってこの場合には *кислота* を基軸的なものと考えなければならない。このように受容と表出の機能を同時に考えれば、この語結合は両方の見出語に収録される必要がある。冗長性の必要性の源泉の一つは、このような表出の機能に存している。これを考える必要のない場合には、基軸性を担うもののみを残せばよいということになる。

以上のような理論的考察から、冗長度は、ある程度品詞、ならびに基本語であるかそれとも学術用語であるかなど、語の性質にも依存していることが分かる。

3. いま、例として『研究社露和辞典』によって、дым「煙」という項をとって考えてみる。括弧の中の e は内心性を、x は外心性を表し、+ は他の見出語の項に重複していることを、また - は重複のないことを表し、また ± は重複はないがよく似た表現があり、類推が可能であることを示す。更に c- は基軸性がこの語にはないことを示す。c+ は特に表示しない。

дым

1. 煙。табачный д. 「たばこの煙」(e+), паровозный д. 「蒸気機関車の煙」(e-), пороховой д. 「硝煙」(e-) / д. (от) костра 「たき火の煙」(e-), д. (от) пожара 「火事の煙」(e-), д. от выстрела 「大砲の煙」(e-), / д. (из) печи (трубы) 「ストーブ (煙突) の煙」(e±±) / густой (едкий) д. 「濃い (目にしみる) 煙」(e++), сплошной д. 「いちめんの煙」(e-) / столб дыма: д. столбом: клубы дыма 「もうもうとたちのぼる煙」(e+++) / окутанный дымом 「煙に包まれて」(e±) / Над костром (большим клубом) поднимался д. (e-), Из трубы идет (валит) д. 「煙突から煙が (もうもうと立ち) のぼっている」(e++), пустить д. (кольцо дыма) 「(たばこなどの) 煙をだす (煙の輪を吐く)」(e-+, c-), увидеть (заметить) д. 「煙を発見する」(e±), Комната была полна дыма (дыму). 「部屋は煙で一杯だった」(e-, c-) / Дыма ел мне глаза. 「煙が目にしみた」(x+), Д. висел над домом. 「煙が家の上に立ちこめていた」(e±), Д. стелется по земле. 「煙が地面をはって行く」(e±), Д. застал окна. 「煙が窓をおおった」(e±), Д. рассеялся. 「煙が散った (消えた)」(e±) / Эти дрова дают много дыму. 「この薪は煙がたくさんでる」(e±, c-), Нет дыму (дыма) без огня. = Дыма без огня не бывает. 「火のないところに煙は立たぬ」(e+), И дым отечества нам сладок и приятен. 「祖国のものとなれば煙すら甘く心地よい」(e-).

2. まぼろし、幻想、幻影。Всё дым и сон — один любовь есть правда. 「全てはまぼろしであり夢である — ただ恋のみが真実だ。」(e-).

3. (古代ロシアの課税対象としての) 家、戸。дань с дыма 「各戸当たりの租税」(e-).

4. в дым 「ひどく、徹底的に」、Он пьян в дым. 「彼はへべれけに酔っている」(x-), д. коромыслом (столбом) 「大騒ぎ、てんやわんや、どんちゃん騒ぎ」、В театре шел дым коромыслом. 「劇場はてんやわんやの大騒ぎであった」(x-), пустить дым. 「うそをつく、煙にまく」(x-), пустить на дым 「火をつけて灰塵にする」(x-), рассеянься (разлететься) в дым (дымом) 「跡形もなく消えうせる、雲散霧消する」(x/e-).

1. の形容詞+名詞の語結合3例は、意味的に内心的であり、同一項目中で冗長度をもつから、1例を除いて削除できる。その際最初の例は別の項目における冗長度をもつから、これをまず省くと、あとは2例が残る。その中から適宜1例を選ぶ。次に選択的な前置詞をもつ生格名詞との結合3例も意味的に内心的であるから、1例を除いて削除する。更に

基軸性をもたないものも削除する。しかし意味的に外心的なものは、他の項目に重複がなく、かつ同一項目中に類例がなければ、省くことはできない。

このような手続きによって整理すれば、дым の項目は次のようなものとなる。但し他項目に重複がある場合には本来は他項目の方の例を削除すべき場合もあるが、いまはこの項目のみを問題にしているから、削除はこの項目の内部で行うものとする。

дым

1. паровозный д., д. (от) костра, д. (из) трубы, д. столбом, д. ел мне глаза.
2. Все дым и сон — одна любовь есть правда. 3. дань дыма. 4. в дым: Он пьян в дым, дым коромыслом (столбом): В театре шел дым коромыслом, пустить д., пустить на дым, рассеяться (разлететься) в дым (дымом).

ここで『岩波ロシア語辞典』の該当する項目に掲げられている例を、いま整理したもの比べると、табачный д. に並んで пороховой д. があり、これは冗長であることになる。また研究社のもと同じく、И дым отечества нам сладок и приятен. が掲げられている。これは意味的に内心的であるから、やはり上述の規準に照らせば、冗長なものとなる。ただしこれはグリゴエドフの「知恵の悲しみ」を出典としており、したがって文化に属するものとされて、収録されたのかも知れない。ちなみにこれはウシャコフの辞典にみられるが、17巻本、4巻本の何れにも見えないようである。しかし、一般にいつて然るべき出典があり、人口に膾炙している表現については、たとえそれが意味的に内心的であり、冗長度を増やすものであっても、ある程度収録することが望ましいこともあると思われる。同じく諺として内心的な Дыма без огня не бывает. がある。これらの場合にはまた別の規準が必要となろう。また意味的に外心的なものについては、用例を省いている。

さて上述の規準を厳格に守って整理した、冗長度が零に等しいものを規準にして、収録された表現の総数（別項目に重複あるいは類例のあるものは2と数える）からその数（13）を引き、その数（13）で割ったものを仮に冗長度とすれば、『研究社露和辞典』の場合は $100 \times (50 - 13) / 13 = 285(\%)$ 、『岩波ロシア語辞典』の場合には $100 \times (10 - 13) / 13 = -23(\%)$ となる。これは (от) костра, (из) трубы, дым столбом のように、異なった構造をもつものでも、意味的に内心的なものは全て削除した結果であると思われる。この場合、表出の機能が若干損なわれることになるかも知れない。全体として『研究社露和辞典』ができるだけ大辞典の性格を保存し、しかも例えば「結合語辞典」に見られるような表出の機能を重視しつつ、技術力を駆使してダウン・サイジングを図っているのに対して、『岩波ロシア語辞典』は、冗長度を思い切って少なくした辞典であることが分かる。このことによって、この辞典は見出語の数を減らすことなく、活字の大きさと引き易さを達成したと見られる。

序に言えば、評者の得た結果を第一段階のダウン・サイジングとすれば、岩波のものは、

上述したように、構造的に異なるものであっても意味的に内心的なものは、原則として一例を除いて削除しているということ、また意味的に外心的なものについては例を示さないという点で、ダウン・サイジングの第三段階にあるということができよう。この後、第四の段階として、意味的に内心的なもの例も全て削除するという場合が考えられる。第五の段階以降のダウン・サイジングは、収容語彙数を減らすことによって実現するより外はないであろう。

さて科学的用語の場合はどうであるかについて、先に挙げた кислота「酸」の場合を見てみよう。はじめに『研究社露和辞典』についてみれば、これは次のようになる。

кислота

1. a. 酸味。к. яблока (вина)「リンゴ(ワイン)の酸味(e-)。b. すっぱいもの。2. 酸。азотная к.「硝酸」(x+), уксуcуная к.「酢酸」(x+), серная к.「硫酸」(x+), синильная к.「青酸」(e+), жирная к.「脂肪酸」(x+), угольная к.「炭酸」(x+), лимонная к.「クエン酸」(x+), винокаменная (винная) к.「酒石酸」(x+), борная к.「ほう酸」(e+), соляная к.「塩酸」(e+), щавелевая к.「蓼酸」(e+), сильные (слабые) кислоты「強(弱)酸」(e--), двухосновные кислоты「二基酸」(e+), органические кислоты「有機酸」(e-).

これに対して『岩波ロシア語辞典』では次のようになっている。

1. 酸味、すっぱい味、酸味のあるもの。2. 酸。сильная (слабая) к.「強酸(弱酸)」(e-), органические (неорганические) кислоты「有機(無機)酸」(e--), кислородные кислоты「オキシ酸、酸素酸」(e-), жирные кислоты「脂肪酸」(x-).

明らかなように、ここにおいても『岩波ロシア語辞典』は徹底して冗長度を低くしている。これに対して『研究社露和辞典』のばあいには、сильные (слабые) кислоты および органические кислоты の場合を除いて全て重複している。表出の機能と受容の機能を同時に考えれば、このような場合には重複はかえって必要であると思われる。前者の場合、кислота という語を知っていても、これを手がかりに例えば「塩酸」をどういふか知ることができないからである。この意味で研究社の辞典において、意味的に外心的な語結合に却って重複がないのは、象徴的である。

このように『岩波ロシア語辞典』は、受容の機能に重点をおいているといえる。基本語彙においてはこれは辞書を引き易く、明快にするが、特に科学用語のように特殊な語彙については、表出の機能に関して使いにくい面が現れるであろう。特殊な用語は術語辞典を見ればよいともいえるが、『研究社露和辞典』に見えるような酸の名称はすでに日常語に属していると考えられる。

もとより既に見たように、『研究社露和辞典』と『岩波ロシア語辞典』とは、その編集の理念を異にしており、何れの方向が優れているというようなものではなく、それぞれの

特徴が、使用の目的によってあるいは長所ともなりあるいは短所ともなると思われるが、この点の考慮がもう少し加えられるならば、『岩波ロシア語辞典』はさらに使いやすいものになると期待される。尤も以上の評言がこの辞典のすべてを尽くすものでは有り得ず、辞書を考える際の一つの視点を提供するものに過ぎないが、これがよりすぐれた評価の規準が設定されるための契機となれば幸いである。『コンサイス露和辞典』あるいはウシャコフ、オージェゴフ、アカデミーの17巻及び4巻の辞書などについてこの規準を適用すれば興味ある結果が得られるが、それはこの書評の範囲を越える。また『研究社露和辞典』にはしばしば文法的に多少とも立ち入った説明がなされているが、これも『岩波ロシア語辞典』では省かれている。

結論的にいえば、以上述べたように、この辞典は冗長度を徹底的に省き、受容の機能を最大限に追求することによって明快さを獲得し、かつ他の大辞典を参照することを必要としない、自己完結性を達成しようとしたものであるということが出来る。そしてその目標は、すでに見たように若干の不徹底さは見られるものの、概ね達成されているといってよい、完成度の高いものであるといえる。ただそれと引換に、表出の機能がいくらか犠牲になっているともいえる。この辺りをどう調和させていくのか、それとも更にこの方向を徹底させていくのか、今後注目したい。

形式的に外心的である動詞について述べる必要があるが、動詞は意義の外延が広く、紙幅の関係で割愛せざるを得ない。またその他の事項について考えることもあるが、現状ではなお断片的であって、印象批評の域を出ない。とりあえず以上にとどめておく所以である。